

主観主義から社会進化へ
—*Austrian and German Economic Thought* を上梓して—
摂南大学 八木紀一郎

これは、2011年5月に福島大学で開催されるはずであった同年度の経済学史学会大会のための原稿であるが、同年11月に延期されて京都大学での大会への出席ができなかったため、進化経済学会の場を借りて報告するものである。原稿自体は、同学会大会実行委員会の好意によって、その報告集のなかに付録として収録されたので、厳密に言えば再録になるが、御海容いただきたい。

1. この報告は私のドイツ語圏経済思想史研究にストーリーを与えようとする試みである。昨年2月に Routledge 社から *Austrian and German Economic Thought* を上梓した。日本語でも『オーストリア経済思想史研究』(1988)と『ウィーンの経済思想』(2004)があるが、この英文書が一番包括的である。というのは、この2著には含まれていないが経済理論史としては当然問題とすべきワルラスの均衡経済学とオーストリア学派との関連、を補足し、ウェーバーの経済社会学の社会進化論という前望的な視点を積極的に打ち出していることによる。それにより、私としては1970年代末のメンガー文庫探索にはじまったオーストリア学派研究は実質的に終了したと思っている。

2. 私の経済思想史研究は、社会史的視点と理論史的視点という両視点をかわるがわるに用いたものであった。より単純に歴史的視点と理論的視点と言ってもよい。前者はオーストリア学派その他の経済学者とその理論的活動を背後の経済史・政治史・社会史のなかに位置づけたものである。『オーストリア』においては19世紀末のハプスブルク帝国における民族問題や大学史、また財政史が含まれていた。また、ミーゼス、シュンペーター、ヒルファーデインクの理論におけるマネタリーな側面を念頭に置いてオーストリア帝国の貨幣・金融問題をとりあげていた。『ウィーン』もカール・メンガーの兄であった議会自由党のリーダーであったマックス・メンガーの政治活動の研究で始まっている。経済学に転じる以前のカール・メンガーのジャーナリスト活動やルドルフ皇太子との連携をとりあげたのも歴史的視点によるものである。ミーゼスの貨幣論と社会主義批判をオーストリアの経済政策史と結び付けて論じてもいる。今度の英文著でも、イントロダクションにあたる第1章にマックス・メンガーを配してオーストリアの(政治的)自由主義の発展と没落を示し、また第2章でジャーナリスト・カール・メンガーを配して『ウィーン』を踏襲した。

私の研究を評価してくださる方の多くは、こうした歴史的研究の側面を高く買ってくださっている。しかし正直に言えば、旧オーストリアにかんする私の歴史的研究は経済思想史研究にとって必要になったトピックを追いかけただけで、旧オーストリアの社会・経済・

政治史をアドホクに探求したものにすぎない。歴史家にとって必須な系統的研究をおこなったものではないので、そのような評価を受けると面映ゆくなる。

3. それでは、理論史的側面における成果は何だったのであろうか。それは、第1には、オーストリア学派を特徴づける主観主義の成立と発展、そして第2には、究極的には進化的理論に至る歴史理論の展開、の二つではないかと思う。それが英文著の副題を **From Subjectivism to Social Evolution** とした理由である。

4. 主観主義 **Subjectivism** とは、人々の経済行動あるいは経済現象を行動主体の意識内容から説明する方法的な立場を意味する。その対極に、人々の意識ではなく、その客観的存在から行動を説明しうるとする客観主義という方法論的立場があると思うが、経済思想史のなかに **Objectivism** という言葉があるかどうかはわからない。この主観主義と客観主義において、その主観・客観の内容を個人に限定する個人主義と、対象とする社会全体に対応する主観・客観がありうるとする全体主義の2タイプがあるだろう。私は、メンガーによって創設されたオーストリア学派の主観主義は、個人主義的な主観主義であると考えている。それに対して、メンガーの論敵であったシュモラーなどの歴史学派は、社会的な倫理に対する考察を経済現象に取りいれなければならないとし、それに対応する全体の立場（国民ないし国家）を想定する全体主義的な主観主義であったと位置づけられるであろう。

5. まず、メンガーの主観主義が価値論の解決とともに成立し、それが全体主義的な主観主義を退けて個人的な主観主義に立つものであったということが重要である。

19世紀半ばのドイツ語圏の経済学では、商品の価値をその需要者にとっての便益から説明する理論（「ドイツ使用価値学派」と呼ばれることがある）が存在していた。それは暗黙のうちに市場で決定された価格を想定して需要者（消費者）の側にそれに対応する主観的な評価（効用）を想定するものであった。市場で決定された単一の価格を前提すれば、それは社会的に承認された主観的な価値になる。（商品数量×価格＝社会の当該商品に対する需要＝社会的な使用価値）

しかしメンガーは、市場での価格決定を前提するのではなく、逆に、市場での価格決定を可能にする人々の交換行動の基礎となる個人の個々の商品に対する価値評価を問い、そこに個々の商品財数量に対する価値評価は商品財の総数量によって変化する（逓減する）という関係を見出したのである。（商品の個別単位の個人にとっての意義＝当該商品財の支配可能数量の関数）

このような関係をもつのは個人の主観的意識における効用評価で、個々人はそれをもとに需要者あるいは供給者として交換行動をおこなう。個々人の効用評価には個人ごとの差異があるので、交換行動が市場において均衡に到達して生み出す価格は各人の交換行動の結果にすぎない。基礎にあって重要なのは、個人の主観的な財評価である。

メンガーの主観的価値論（限界効用価値理論）は、交換行動を基礎づけることによって市場での価格決定を解決できた。このオーストリア学派の主観的価値評価の理論は、個人的需要を価格の関数とするワルラスとは異なる。この両者の差異は、ワルラスの均衡価値理論と対比してヴィーザーの自然価値の理論を説明した章で論じた。

主観主義の方法論的な意味も興味ある問題である。『原理』執筆時のメンガーは、経済学の論理を因果関係とみなしていたが、後には意識内の目的合理的な関連として理解するようになった。

6. 個人主義的な主観主義を方法論的な立場にする際に問題になるのは、個々人が世界を勝手に想像し勝手に修正しあっていると考えることで、社会的に何らかの意味のある科学的な認識が生まれうるかという問題である。歴史学派の全体論的な主観主義にかえてオーストリア学派の個人主義的主観主義を採用したマックス・ヴェーバーが、自分が責任編集者として再出発した雑誌の巻頭に掲載したマニフェスト的な論文のタイトル「社会科学および社会政策における認識の『客観性』」が示唆的である。このタイトルのなかで「客観性」には括弧が付されているのである。

この問題を解決するのに、経済学者は通常、市場における均衡に注目する。背後における個人の行動が個人的主観主義的に律されていたとしても、市場は市場参加者にとって共通な価格を客観的に生み出しているというのである。価格を変数として個人の市場での交換行動を想定したワルラスの需要関数はこうした立場を表明したものである。それに対して均衡を前提にしないオーストリア学派の個人主義的な価値評価論は、均衡が到達されない場合でも、個人の経済的な活動が行われうると説いた。これは、ノンワルラシアンを経済理論として根岸隆によって再評価された。

7. 個人的主観主義では歴史的な過程は説明できないのではないかという疑問に対する解答が、メンガー『方法論』で提示された、個人的・主観的行動の累積的結果としての制度形成の理論である。英文著では、このアイデアをアントン・メンガーの「勢力関係」の議論と対比し、さらにそれがヴィーザーの「社会的勢力」の理論を生み出したことを説明した。

こうした個人的・主観的行動の累積性は、経済主体が多数あることを前提している。そこで問題になるのは、行動累積の結果が経済主体に対してフィードバックされるメカニズムである。ワルラス的な市場も多数主体の行動結果の累積的結果を個人に返すメカニズムの一種であるが、不均衡が累積する経済過程の説明には向いていない。

個人行動の主観主義的な特性を強調するオーストリア学派的な特質を、革新と模倣による経済的変化の理論として発展させたものがシュンペーターの『経済発展の理論』である。この経済的変化が制度変化と個人の効用の変化にまで結びつくなれば、それは「経済的進化」であると言ってよい。また、経済面の変化が、経済以外の社会的・文化的・政治的領

域における変化の過程と相互作用することを想定するならば、それはより一般的な「社会進化」の理論になる。

8. 個人の意識内容に左右されない客観的な説明をめざす客観主義の理論は、何らかの因果的な決定性を追求しようとするが、主観主義の経済理論ではそれができない。それに代わって一般に想定されているのが、経済主体は「合理的に行動する」という想定である。しかし、主観的にみて合理的な行動と結果としての合理性は乖離しうる。英文書の最後の章では、マックス・ヴェーバーの「整合合理性」と「価値合理性」の概念を用いて、彼の宗教社会学を「社会進化論」として解釈しうることを説明した。ヴェーバーの『客観性』は、新カント派の認識論にもとづいた彼のもともとの考えでは、不変の価値（真・善・美）との関係で生まれた「認識関心」と「価値関係性」のもとで整合的な類型を理想的に構成することが「客観性」を確保する方法であった。しかし、この理想型は、実在現象との関連性が保障されない。類型論は、現実のなかでそれが選択されるプロセスの理論によって補完されなければ、知的遊戯にとどまるだろう。私は、このことを認識して歴史的過程のなかでの選択の過程の解明に取り組んだものがヴェーバーの文化社会学であったと考えている。

9. 私は、こうした進化的過程の考察においては、視点を認識論的なものから存在論的なものに転換する必要があるのではないかと考えている。多数主体は、特定の時間・空間のなかで、その主体の内部的資源（知識・嗜好・能力）、および物質的・情報的環境とともに存在している。そうした多数主体の主観主義的な行動の相互作用の結果が、何らかのメカニズムによって各主体にフィードバックされ、そのなかで革新・模倣のような質的变化を含む行動調整がおこなわれ、同時に累積的結果を吸収する何らかの制度形成がおこなわれる。

始祖メンガーにおいてすでに存在した多数主体の行動の累積的効果の議論は、このようにして進化的理論にまで結び付けられる。19世紀後半のメンガーの主観主義的な価値理論の登場は、通常、市場均衡を軸にした新古典派理論に集約されると考えるのが標準的な解釈である。しかし私は、それが社会的な進化の理論につながりうるという、もう一つのストーリーが構成されうると考える。